

第8回特別支援教育実践研究センターセミナー報告

福井 美保*

講演テーマ：「学校で働く看護師の役割について」

講師：植田陽子 氏（医療法人財団はるたか会 Nurse Fight プロジェクト担当看護師）

主催：大阪大谷大学特別支援教育実践研究センター

日時：令和4年11月18日 18:30～20:00

場所：大阪大谷大学ハルカスキャンパス（現地参加とZoom参加によるハイブリット）

参加者：約70名（卒業生、大阪大谷大学学生、学校教員等）

大阪大谷大学特別支援教育実践研究センターの第8回セミナーは、病院看護師として勤務されたのち、学校看護師として豊中市教育委員会に所属され医療的ケアのマネジメント業務を担当されていた、植田陽子先生を講師としてお招きした。植田先生は、2021年に豊中市をご退職後されたのち、全国の学校看護師の方の元を訪ねるなど、学校看護師の待遇・役割の地域格差改善を目的としたNurse Fightプロジェクトを立ち上げている。今回は、「学校で働く看護師の役割について」をテーマにご講演いただいた。講演の最後には、参加していた学生達からも活発な質問があり、丁寧に回答していただき充実した学びの時間となった。以下に、講演の概要を報告する。

1. 「子ども達は何のために学校に来ているのか？」

植田先生が最初に受講者に投げかけた質問です。

⇒学校は子ども達が「学ぶ場所」である。

医療的ケアを受けに来る場所ではありません。

*大阪大谷大学教育学部

2. 学校看護師の現状について

学校看護師は、「学校で働く看護師」のことを言う。しかし、どのような役割を担い、どのような業務を行っているかについては、看護師の中でも、十分に認知されていない現状がある。学校看護師は令和3年で約4600人いると報告されている。これは看護師免許を取得し、実際に看護師として働いている人の0.2%である。訪問看護師が約3.6%であると考えれば非常に少ない。平成31年に文部科学省から「学校における医療的ケアの今後の対応について」として、各学校に医療的ケア児の状態に応じた看護師等の適切な配置を行うことが必要であると通達があったが、配置の状況は地域によって、人数、待遇などが大きく異なっている。

3. 学校看護師の役割とは

文部科学省が示す学校看護師の役割には、以下の内容があげられる。

- ① 医療的ケア児のアセスメント
- ② 医療的ケア児の健康管理
- ③ 医療的ケアの実施
- ④ 主治医，学校医，医療的ケア指導医等の関係者との連絡，報告
- ⑤ 教員，保護者との情報共有
- ⑥ 認定特定行為業務従事者である教員への指導・助言（特に特別支援学校の場合）
- ⑦ 医療的ケアの記録，管理，報告
- ⑧ 必要な医療器具，備品等の管理
- ⑨ 指示書に基づく個別マニュアルの作成
- ⑩ 緊急時のマニュアルの作成
- ⑪ ヒアリハット等の事例の蓄積と予防対策
- ⑫ 緊急時の対応
- ⑬ 教員全体の理解啓発
- ⑭ （教員として）自立活動の指導等

このように、学校看護師は単に「医療的ケアと実施する人」ではなく、医療的ケアを必要とする児童・生徒が学校で安全に学べるように、様々な役割とになっている。しかし、病院等で働く看護師とはちがった視点、技能が必要であるが、特別なライセンスはなく、看護師免許取得のために必修の研修ともなっていない。

4. 学校において医療的ケアを実施する意義

医療的ケアを必要とする子ども達の中には、医療的ケアが学校でおこなえないため通学できない子ども達もいた。学校で医療的ケアを実施することで、今まで登校できなかった子ども達に教育機会の確保・充実を行えるようになる。また、学校で医療的ケアが実施されることで、本人の苦痛や危険を取り除けるだけでなく、健康の保持や心理的安定、信頼関係の構築などの育成にもつながり、障害による困難の改善はいわゆる「自立活動」の観点でもある。

(例) 経管栄養や導尿を通じた生活リズムの形成 (健康の保持・心理的な安定)

吸引や姿勢変換の必要性など自分の意志や希望を伝える力の育成

(コミュニケーション・人間関係の形成)

排痰の成功などによる自己肯定感・自尊感情の向上

(心理的な安定・人間関係の形成) など

5. 学校での看護師と教員の連携

看護師は医療・看護について、教員は教育活動について、それぞれが高い専門性と求められる職業である。そのため、看護師と教員が連携しているときに重要なことは、双方がその専門性を発揮して児童生徒の成長・発達を最大限に促すことである。学校現場において、お互いの専門性を活かす連携とは、教員が専門性を活かした指導計画が円滑に進められるように医療的ケアのある子ども達をどうサポートするかを看護師が専門性を活かして考え、実行することであると考えられる。「教員による指導」という柱のかけているところを、看護師、さらには医師や保護者をもつ専門性や知識というピースで埋め、支えることであると考えている。そのため、教員と看護師が、教員が考える子ども達の指導案を共有し、その「学びの達成度」の評価も共有することが重要である。子ども達の学びの達成度こそが、学校看護師の看護目標の達成になる。

